

# 二種類の範疇変化とその構造的定義：

## 否定の接頭辞と右側主要部の規則

田川 拓海

### 1 はじめに

本稿では、分散形態論 (Distributed Morphology: 以下 DM (Halle and Marantz (1993) 他)) に基付いた語形成の理論を用いて、右側主要部の規則 (Righthand Head Rule: 以下 RHR (Williams (1981))) に対する例外であると言われてきた、否定の接頭辞が語の範疇を変化させる現象について考察する。

少なくとも英語や日本語の語形成においては、基体の範疇<sup>1</sup>を変化させるものは、接尾辞には豊富に存在するのに対して、接頭辞で範疇変化を引き起こすものは非常に少なく、例外的であると言われている (Williams (1981)、影山 (1993) など)。その例外として日本語の例でよく挙げられるのが否定の接頭辞である<sup>2</sup>。

(1) 勉強 (N, \*A)→不勉強な (A)、経済 (N, \*A)→不経済な (A)

本稿では、DM における語形成の理論を導入することによって、(1) のような範疇変化が、接尾辞による範疇変化とは異なったプロセスを経てなされていることを示し、語形成における「範疇変化」という概念のより厳密な定式化を提案する。本稿の具体的な主張は以下の通りである。

---

<sup>1</sup> 本稿の分析においては、「品詞 (part of speech)」と同じように捉えても大きな支障は無いが、「範疇 (category)」は純粋に (形態)統語論的な特徴である。

<sup>2</sup> 以下、範疇を頭文字で表すこととする。それぞれ、次のように対応する。V: 動詞、N: 名詞、A: 形容(動)詞

## (2) 本稿の主張

## a. 範疇変化には、

- 1) 特定の範疇をとって、特定の範疇へ変換するもの
- 2) 範疇が決定される前の要素に影響を与えることによって、最終的な範疇の選択を変化させるものの二種類があり、それぞれ構造的に定義することができる。

## b. 接尾辞における範疇変化は、上記 a の 1) に類するものであり、否定の接頭辞による範疇変化は a の 2) に相当するものである。

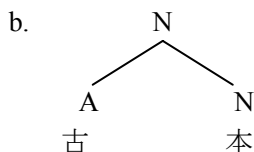
## c. 従って、否定の接頭辞による範疇変化は、右側主要部の規則の厳密な意味での例外ではない。

## 2 範疇変化と右側主要部の規則

本節では、否定の接頭辞に関する問題の前提となる概念について整理する。

語形成の理論では、範疇を決定している部分が、語 (word) における主要部 (head) であると考えられる。例えば、(3) の例では、全体では名詞 (N) になっているので、「本 (N)」が「古本 (N)」の主要部である。

## (3) a. 古 (A)+本 (N) → 古本 (N)



語形成における主要部をこのように捉えれば、少なくとも英語や日本語において次のような一般化が成り立つことが知られている (Williams (1981)、影山 (1993))。

## (4) Righthand Head Rule: RHR (右側主要部の規則)

In morphology, we define the head of a morphologically complex word to be the righthand member of the word. (Williams (1981))

この規則は、(5) のような例に見られるように、接頭辞が基体の範疇を変化させないのに対して、接尾辞には基体の範疇を変化させるものが豊富に存在するという経験的事実に支えられている。

(5) a. 英語

V-ion→N, A-ness→N, X-ize→V, X-ish→A, ...

b. 日本語

A-さ→N, V-方→N, A-がる→V, N-らしい→A, ...

一方で、例外的に基体の範疇を変化させる接頭辞が存在する、と言われることがある。日本語で良く例として挙げられるのが本稿で取り扱う否定の接頭辞なのである (野村 (1973)、影山 (1993)、宮岡 (2002) など)。

### 3 否定の接頭辞「不」が引き起こす「変化」の特徴

本節では、「不」を例にとり、否定の接頭辞が具体的にどのような範疇変化を引き起こすのか整理し、その特徴を記述する<sup>3</sup>。

様々な語彙に対して「不」は付加することができるが、その付加前の範疇と、付加後の範疇の対応のパターンは次のようにまとめることができる<sup>4</sup>。

<sup>3</sup> 否定の接頭辞には他にも「無」、「未」、「非」が存在するが、本稿では取り扱わない。「不」を選択したのは、「無」が存在の有無、「未」が動作のアスペクトに関する意味を持つのにに対して、「不」がより純粋な「否定」の意味を持つと考えているからである。他の接頭辞も含めた包括的な記述に関しては野村 (1973) を参照されたい。「不」のみを扱うことは、本稿の目的及び分析に関して支障は無い。本稿で提案する理論が否定の接頭辞一般にどのように適用されるのか、という点に関しては今後の課題としたい。

<sup>4</sup> 筆者は、いわゆる形容動詞は統語的には形容詞と同じであると考えているが (Nishiyama (1999), Baker (2003) など)、ここでは形態的な違いを示すために便宜的に形容動詞と表した。さらに、「動名詞 (Verbal Noun)」という範疇も理論的には必要無いと考えているが、ここでは「「する」を付加して動詞にもなる名詞」というぐらいの意味合いで便宜上使用している。

- (6) a. 形容(動)詞 (A)→形容(動)詞 (A)<sup>5</sup>  
 親切な→不親切な、健康な→不健康な、公平な→不公平な...
- b. 名詞 (N)→形容(動)詞 (A)  
 道德→不道德な、衛生→不衛生な、活性→不活性な、  
 定期→不定期な、...
- c. 動名詞 (VN)→形容(動)詞 (A)  
 勉強 (する)→不勉強な、安定 (する)→不安定な、  
 案内 (する)→不案内な...
- d. 動名詞 (VN)→名詞 (N)  
 登校 (する)→不登校 (\*な/\*する)、  
 使用 (する)→不使用 (\*な/\*する)、...
- e. 和語動詞連用形に付加している例  
 釣り合い (N)→不釣り合いな (A)、そろい (N)→不そろいな (N)、  
 出来 (N)→不出来な (A)、払い (N)→不払い (N)、...

ここで重要なのは、「不」が様々な範疇変化を引き起こすこと、さらに同一の範疇に付加しても派生される要素の範疇が一定ではない、という点である。これは明らかに「～さ (A→N)」、「～方 (V→N)」、「～がる (A→V)」などが担う「範疇変化」と同じであるとは言えない<sup>6</sup>。接尾辞が担ういわゆる「範疇変化」とは、関数的関係である、すなわち出力される範疇が必ず一種類であることが大きな特徴の一つだからである (cf. Baker (2003))。

これはさらに、一つの語彙項目に関しても、「不」が付加した後でも二つ以上の品詞として使用されうるという点から支持される。

- (7) a. 不勉強な裁判員というのは困る。(A)  
 b. 英語の不勉強が問題だ。(N)

<sup>5</sup> ここでは範疇が形容動詞であるということを明示するために連体形で表示する。

<sup>6</sup> 同じような観点から、範疇変化と接辞の性質の関係について考察したものとして杉岡 (2005) も参照されたい。

上の例において、(7a) では「不勉強」が形容動詞として使用されているのに対して、(7b) では内項をとり名詞として使用されている。これは、よく言われるように形容動詞の語幹が名詞的に使用されるのとは異なっていると考えられる。単純な形容動詞の例を次に挙げる。

- (8) a. 先輩に忠実な太郎  
       b. 忠実が太郎の信条だ。  
       c. ??太郎の先輩への忠実にはいつも驚かされる。  
       d. 太郎の先輩への忠実さにはいつも驚かされる。

(8a) に見るように、形容動詞「忠実 (だ)」は対象項を二句としてとり、名詞として使用することもできるように見える ((8b))。しかし、(8c, d) の対比に見られるように、形容動詞が項を持った名詞句として機能するにはやはり「さ」などで名詞化する必要があると考えられる。

以上で示したように、「不」が引き起こす範疇変化は、接尾辞による範疇変化とは明らかに異なった特徴を持っている。次にまとめる。

- (9) 接辞付加による範疇変化の二つのタイプ  
       a. 接尾辞による範疇変化：出力される範疇が一つに決まっている、関数的対応<sup>7</sup>  
       b. 「不」による範疇変化：出力される範疇には複数の可能性があり、付加する基体によって異なる。

#### 4 DM による語形成への統語論的アプローチ

本節では、(9) でまとめた範疇変化の二つのタイプを分析するための、DM の枠組みにおいて提案された語形成への統語論的アプローチを紹介し、重要となる概念について整理しておく。

<sup>7</sup> 入力側の範疇の候補は複数である場合もある (cf. Baker (2003))。

#### 4.1 DMの基本的な仮説

まず、DMの文法モデルにおいては、次の二つの仮説が仮定される<sup>8</sup>。

##### (10) Single Engine Hypothesis (There is no “generative” lexicon)

それがいかなる要素であっても、何かを”組み合わせる”操作は、全てsyntaxで行われる<sup>9</sup>, <sup>10</sup>。統語部門と独立した、語形成が行われる部門は存在しない (Marantz (1997, 2001), Arad (2003), Embick and Noyer (to appear))。

##### (11) Root Hypothesis

いわゆる語彙範疇の統語範疇 (V, N, A...) は、要素自体にもともと指定されているのではなく、範疇未指定の要素、“√ (root)” に対して、統語部門 (syntax) における指定がなされることによって決定される<sup>11</sup> (Marantz (1997, 2001), Harley and Noyer (1999), Arad (2003), Harley (2003))。

(10) の仮説は、すなわち語形成も統語論の原理に従って行われているということであり、(11) の仮説は、語彙主義 (lexicalism) では統語的原始 (syntactic atom) として取り扱われる、動詞、形容詞などの語彙項目が統語部門において形成されるものであることを提案している。

<sup>8</sup> 他にもLate Insertionなど重要な仮説が存在するが、ここでは本稿の議論に関係するものだけを紹介する。

<sup>9</sup> 「語形成もsyntaxで行われる」という仮定自体はDM特有のものではないことに注意されたい。語形成がどの部門で行われるかということはこの理論とは独立にずっと問われてきた問題である。語形成とsyntaxの関係についての種々の立場や理論についてはBorer (1998), Ackema (1999) なども参照されたい。

<sup>10</sup> DMは語形成特有の部門を全く仮定しない、という点においてRoeper and Siegel (1978), Hale and Keyser (1993, 2002) などの統語論的アプローチより強い立場であると言える。

<sup>11</sup> この考え方にはさらに、機能範疇が直接√Pを選択するという立場 (Harley (2003) など) と、統語的に語彙的主要部 (lexical head) が存在すると考える立場 (Arad (2003) など) がある。最近では後者の立場がとられることが多い。

## 4.2 Root-derived word と Word-derived word

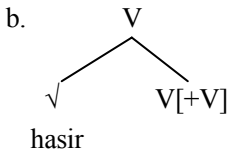
前項で提示した (10), (11) の基本的な仮説に基づいて、Marantz (2001) で示唆されたアイディアを基に、Arad (2003, 2005) は語の派生の仕方について大きく分けて二つの種類があることを提案し、次のように定式化している。

- (12) a. Root-derived word:  $\sqrt{\quad}$ から直接形成される語。ここから派生される V, N, A それぞれには比較的規則的な関連性が無い。  
 b. Word-derived word: 一旦語彙範疇が指定された要素、から派生される語。元の語の意味論的/音韻論的特徴を引き継ぐ。

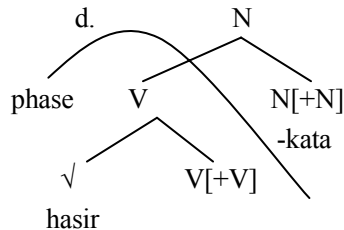
これはすなわち、 $\sqrt{\quad}$ に最初の語彙範疇が指定されて語が形成される過程と、一旦範疇が指定されたものに対して何らかの操作を行い語を派生する場合との間には質的な差があるという主張である<sup>12</sup>。

日本語の「走る (hasir)」を用いて簡単な例を次に示す。

(13) a. hasir ( $\sqrt{\quad} \rightarrow V$ )



c. hasir(i)-kata<sup>13</sup> ( $\sqrt{\quad} \rightarrow V \rightarrow N$ )



この場合は、(13a) の “hasir”、あるいは (13c) の “hasir(i)” まだが Root-derived word であり、(13c) の “hasir(i)-kata” が Word-derived word である。

さらに、これらの間に質的な差が存在するということは、統語論における局所性を規定するための概念である、phase (Chomsky (2000, 2001) など) を導

<sup>12</sup> 範疇未指定の状態から各語彙範疇への派生を考えるという発想自体は新しいものではない。例えば、斉藤 (1992) などを参照。

<sup>13</sup> 連用形の “i” は語中音添加 (epenthesis) である (田川 (2005a))。

入することによって捉えられる。

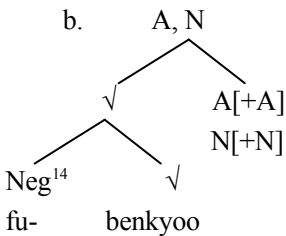
(14) Lexical Head as Phase Head: 各語彙範疇 (lexical category) はそれぞれ一つの phase を形成する (Marantz (2001), Arad (2003, 2005))。

(13d) の構造において、節点 V と N の間にまたがっている曲線が phase を示している。これはすなわち、Root-derived word と Word-derived word の間には、統語論的な一つの境界 (boundary) が存在することを示している。

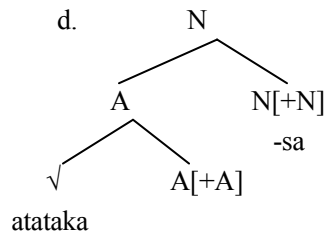
## 5 分析：√への付加

本節では、3 節 (9) において整理した接尾辞と接頭辞「不」の範疇変化の相違が、4 節で導入した Root-derived word と Word-derived word という区別によって分析できることを示す。具体的な構造は次のようになる。

(15) a. fu-benkyoo ( $\sqrt{\rightarrow}A, N$ )



c. atataka-sa ( $\sqrt{\rightarrow}A \rightarrow N$ )



否定の接頭辞「不」は√、つまりまだ語彙範疇に関する情報が決定されていない要素に直接付加する要素であると考え<sup>15</sup>。つまり、「不」が付加されて派生される語はRoot-derived wordである。その後、「不」と基体の複合体全

<sup>14</sup> ここで「不」の範疇を「Neg」としたのは、このようないわゆる否定の接頭辞は否定辞として機能している (奥津 (2004)) という主張を踏まえている。奥津 (2004) の指摘は否定の接頭辞に関する現象を考える上では重要であるが、ここでは取り上げない。

<sup>15</sup> 語彙的主要部 (lexical head) より下位の、√のレベルにおいて付加する接頭辞の存在と分析例に関しては、Marantz (2007) も参照。



体に対して語彙的主要部 (lexical head) が併合 (merge) し、その範疇特性が決定される。

一方、範疇変化を担う接尾辞は、一旦範疇が決定された構造を選択している。これは「さ」などの付加によって形成される語は Word-derived word であるということであり、この構造 ((15d)) は、範疇変化を担う接尾辞の「特定の範疇をとり、特定の一つの範疇を出力する」という特徴を適格に捉えることができる。

では、「不」の場合はどのように捉えれば良いのであろうか。この場合も「不」は√に何らかの情報を付与することによって範疇の決定に影響を与えているので、ある意味で「変化」に寄与しているということはあるであろう。しかし、その「変化」のプロセスは上で示した接尾辞の場合とは全く異なるものである<sup>16</sup>。

また、「不」の基体に対する音韻的な影響を考えても、「不」と√は局所的 (local) な関係にあるということがわかる。

(16) a. benkyoo → fu-be<sup>ɿ</sup> nkyoo (勉強→不勉強)

b. hara<sup>ɿ</sup> i → fu-ba<sup>ɿ</sup> rai (払い→不払い)

(16) に示したように、「不」は語全体のアクセントを変化させる<sup>17</sup> (‘<sup>ɿ</sup>’)は語アクセントの位置を示す)。これは、Arad (2003, 2005) の「Root-derived word を形成する要素同士は、意味論的、音韻論的に強く結びついている」という予測に合致する<sup>18</sup>。

また、この語アクセントの問題では、同じく否定の接頭辞である「非」に

<sup>16</sup> 具体的に「不」が基体の範疇変化にどのように影響しているか、例えば「不」が付加すると「する」を付加して動詞として用いることができなくなる、というような特徴などについては、さらに考察が必要である。例えば、「否定」という意味の付加によって状態性が生じるため動詞にはなれなくなる、といったような分析が考えられるが、その研究には他の否定の接頭辞も含めた形で、意味論的な分析も丁寧に行わなければならないと考えられるため、稿を改めて論じることにする。

<sup>17</sup> また、和語動詞連用形の例 ((16b)) では連濁も起こっている。

<sup>18</sup> 語形成と語アクセント、局所性の関係については田川 (2005b) も参照されたい。

関して興味深い現象が存在する。

(17) a. goohoo → hi-go<sup>1</sup> ohoo (合法→非合法)

b. goohoo-teki → hi-goohoo-teki (合法的→非合法的)

(17a) のように、「合法」に「非」が付加された場合は、上で見た「不」の場合と同じように語アクセントに変化が見られるが、「合法的」に「非」が付加した場合は、そのような変化は観察されない。

これは、「的」が名詞から形容(動)詞を派生する接尾辞である(影山(1980)など)と考えれば、本稿の枠組みによって分析することができる。すなわち、(17a) では「非」は「合法」という√に直接付加しているのでその語アクセントに影響を与えることができるが、(17b) では「的」の付加によって一度「語」、つまりphaseが形成されるため、「非」は√と局所的な関係に無く、影響を与えることができないのである<sup>19</sup>。

また、「～的」という語に「非」を付加しても範疇が変化することは無く、「的」が決定する範疇、すなわち形容(動)詞をそのまま受け継ぐ、というのも否定の接頭辞そのものが範疇特性を持つ主要部ではないということを示していると考えられる<sup>20</sup>。

以上示したように、DM による語形成への統語論的アプローチを導入することによって、否定の接頭辞が示す「範疇変化」の性質と、さらに接尾辞による範疇変化との違いを適格に特徴づけることが可能となった。また、このアプローチにおいては、否定の接頭辞はそもそも範疇素性を持った主要部では無いということが明らかである。つまり、否定の接頭辞付加による範疇変化はRHRの例外ではないのである。

<sup>19</sup> ここではさらに、(17b) の場合は接頭辞が付加しているにも関わらず、依然として「合法的」で一つのminor phraseを保っているという音韻的現象も大きな特徴であるが、これは音韻論と語形成、あるいは統語論の関係に関する大きな問題の一つでもあるため、ここでは割愛する。このような接辞やminor phraseと語形成の関係についてはPoser(1980)などを参照。

<sup>20</sup> これはすなわち、「非」はWord-derived wordも形成することができるということを示している。「不」と「非」の相違点などについては今後の課題としたい。

## 6 おわりに

### 6.1 他の語形成への敷衍

本稿で示した理論からすると、様々な語形成の現象において、Root-derived と Word-derived の区別は重要な役割を担っているということが予測される。例えば、本稿で取り扱った否定の接頭辞に似た現象を引き起こす接頭辞に、「小」が挙げられる。

(18) a. V になるもの

小走りする、小売りする、小書きする、小切りする、小太りする、...

b. N になるもの

小競り合い、小遣い、小作り、小降り、小回り、小止み、...

c. A になるもの

小刻み (な)、小振り (な)、...

上に示すように、「小」は和語の動詞に付加した場合、「不」と同じようなパラダイムを形成する。これらのような現象が、本稿で示した枠組みによってどのように統一的に分析できるかを考えることは、日本語の語形成の研究に対する大きな貢献になるであろう。

### 6.2 RHR について

本稿では否定の接頭辞に関する現象が RHR に対する反例にはならないことを示したが、RHR 自体は「Syntax における普遍的な原理として」は保持されないと考えられる。

(19) Hebrew (Arad (2005))

$\sqrt{xzq}$

a. CaCaC: xazaq A, 'strong'

b. CiCCeC: xizeq V, 'to strengthen'

c. CoCeC: xozeq N, 'strength'

(19) のヘブライ語のように線形的な語形成を行わない言語の現象に関し

ては、そもそもRHRは機能するとは考え難く、とても普遍的な原理とは言えない。一方で、RHRは日本語や英語でなぜ保持されているように見えるのか、という点について考察する必要がある。すなわち、RHRは原理というよりは形態論のレベルにおける記述的な一般化なのである。この語内の構造と語形成における要素の順番についての問題は、句のレベルにおける語順も視野に入れ、今後も考察を深めたい<sup>21</sup>。

### 6.3 本稿の理論的含意

本稿の理論的な意義は、まず語形成における「範疇変化」に二つのタイプがあることを示し、それらをさらに構造的に定義したことである。DMの枠組みを用いた、語形成に対する統語論的アプローチはまだ始まったばかりであり、日本語の様々な語形成の現象を分析することは、語形成、あるいは形態論の理論自体に対する大きな貢献となると考えられる。

また、ヘブライ語の語形成の研究を中心に確立された Arad (2003, 2005) の理論が日本語の現象にもそのまま応用できることを示した。このような研究を進めていくことにより、さらに英語、ラテン語などを含めた形で、異なった統語論や形態論のシステムを持つ言語を対象にした対照言語学的な観点からの研究が行えると考えている。

### 【参考文献】

- Ackema, Peter (1999) *Issues in morphosyntax*. Amsterdam: John Benjamins Pub Co.  
 Arad, Maya (2003) Locality constraints on the interpretation of roots: The case of Hebrew denominal verbs. *Natural Language & Linguistic Theory* 21: 737-778.  
 Arad, Maya (2005) Word-level phases: Evidence from Hebrew. In: Martha McGinnis and Norvin Richards (eds.) *Perspectives on Phase: MITWPL* 49: 29-48.  
 Baker, Mark C. (2003) *Lexical categories: Verbs, nouns and adjectives*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.  
 Borer, Hagit (1998) Morphology and syntax. In: Andrew Spencer and Arnold M. Zwicky

<sup>21</sup> 語形成における構造と要素の順番の関係についてはDi Sciullo (2005)などを参照。

- (eds.) *The Handbook of Morphology*, 152-190, Oxford: Blackwell Publishers.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In: Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In: Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Di Sciullo, Anna Maria (2005) *Asymmetry in morphology*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Embick, David and Rolf Noyer (to appear) Distributed Morphology and the syntax/morphology interface. In: Gillian Ramchand and Charles Reiss (eds.) *The Oxford Handbook of Linguistic Interfaces*, Oxford: Oxford University Press.
- Hale, Ken and Samuel Jay Keyser (1993) On the syntax of arguments and the lexical expression of syntactic relations. In: Ken Hale and Samuel Jay Keyser (eds.) *The View from Building 20*, 53-109, Cambridge, MA: MIT Press.
- Hale, Ken and Samuel Jay Keyser (2002) *Prolegomenon to a theory of argument structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Halle, Moris and Alec Marantz (1993) Distributed Morphology and the pieces of inflection. In: Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser (eds.) *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvan Bromberger*, 111-176. Cambridge, MA: MIT Press.
- Harley, Heidi (2003) How do verbs get their names? Denominal verbs, Manner Incorporation, and the ontology of verb roots in English. Talk at the Ben-Gurion University Workshop on 'The syntax of aspect'.
- Harley, Heidi and Rolf Noyer (1999) Distributed Morphology. *Glott International* 4 (4) : 3-9.
- 影山太郎 (1980) 『語彙の構造―日英比較』 松柏社.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- Marantz, Alec (1997) No escape from syntax: Don't try a morphological analysis in the privacy of your own lexicon. *UPenn Working Paper in Linguistics* 4 (2) : 201-225.
- Marantz, Alec (2001) Words. ms.
- Marantz, Alec (2007) Restitutive re- and the first phase syntax/semantics of the VP. Talk

at University of Maryland.

宮岡伯人 (2002) 『「語」とはなにか: エスキモー語から日本語を見る』三省堂.

Nishiyama, Kunio (1999) Adjectives and the copulas in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8: 183-222.

野村雅昭 (1973) 「否定の接頭語「無・不・未・非」の用法」『ことばの研究』国立国語研究所.

奥津敬一郎 (2004) 「非存在と存在の複合語」『都大論究』41: 1-12.

Poser, William J. (1980) Word-internal phrase boundaries in Japanese. In: Sharon Inkelas and Draga Zec (eds.) *The Phonology-syntax Connection*, 279-288. Chicago, IL: The University Chicago Press.

Roeper, Thomas and Muffy E. A. Siegel (1978) A lexical transformation for verbal compounds. *Linguistic Inquiry* 9: 199-260.

斉藤倫明 (1992) 『現代日本語の語構成論的研究-語における形と意味-』ひつじ書房.

杉岡洋子 (2002) 「第 3 章 複数のレベルにまたがる語形成」原口庄輔他 (編) 『語の仕組みと語形成』: 69-145 研究社.

杉岡洋子 (2005) 「名詞化接辞の機能と意味」大石強他 (編) 『現代形態論の潮流』: 75-94 くろしお出版.

田川拓海 (2005a) 「現代日本語における動詞連用形の形態統語論的考察—拡散形態論の観点から—」『第 130 回日本言語学会予稿集』: 110-115.

田川拓海 (2005b) 「動詞と形容詞の形態統語論的な相違点について」『筑波応用言語学研究』12: 71-84.

Williams, Edwin (1981) On the Notions ‘Lexically Related’ and ‘Head of a Word’. *Linguistic Inquiry* 12: 245-274.

# Syntactically defining two types of category change:

## Negative prefixes and the Righthand Head Rule

Takumi TAGAWA

This paper provides a syntactic definition of lexical category change.

In Japanese, some negative prefixes: *fu-*, *hi-*, *mu-*, *mi-* often change categories of their bases which they attach to. It is known as an exception to the Righthand Head Rule: RHR (Williams (1981)), which generalizes that a head of a (complex) word is a righthand member of it.

However, this case really is not an exception to the RHR if “Category Change” is defined properly. First, I indicate that the property of category change which negative prefixes trigger is different from the other general one which many suffixes bring; the former outputs various categories while the latter has each unique outputs. Second, I show that these two types of category change can be defined syntactically in the word formation theory of Distributed Morphology. The negative prefixes adjoin to a category-unspecified root directly whereas category changing suffixes select a category-specified word as its complement. It means that the negative prefixes affect their base not syntactically (categorially) but semantically.

This distinction corresponds to a distinction between “Root-derived word” and “Word-derived word”, which is developed in a study of Hebrew word formation by Arad (2003, 2005). This theory applies syntactic locality to process of word formation. It is also supported by some phonological phenomena in the case of Japanese negative prefixes.